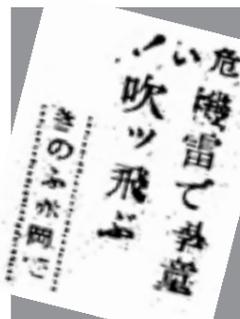


戦争の傷跡

戦後の子どもたち

戦争が残したもの……

赤岡海岸で機雷爆発事故が発生！



戦後の日本には戦争の遺物、爆弾や機雷、地雷などがたくさん残されました。

そのため、子どもが犠牲になる爆発事故が相次ぎ、赤岡海岸では機雷が爆発。9人の幼い命が奪われました。また、西川村(現在の香我美町西川)の少年が手りゅう弾を拾い、自宅へ帰る途中に爆発し、左手の指を切断する事故もありました。この時代、危険は子どもたちの生活とすぐ隣り合わせでした。

終戦から62回目の夏を迎え、当時を知る2人に、お話を伺いました。

機雷(きらい)…機械水雷の略で、水中の広い範囲に設置し、敵の軍艦が接近、接触したときに作動する水中兵器。

爆発事故が起こった

当時を思い出して

昭和21年6月17日に爆発事故は起こった。

終戦翌年のまだ憲法も定まらない不安定な時代、子どもたちは海で泳いだり、地引き網の手伝いをしたりして過ごしていた。当時の赤岡の浜は、ソフトボールができるくらい広く、今の55号線あたりには松原があり、浜にあげた船の中でかくれんぼなどして遊んだ。

昭和23年ごろまでは、日本軍が海に設置した機雷が漂い、それを船でよけることが3日に一度はあった。今だったら緊急封鎖され、大ニユースになるところだが、当時はまだ機雷の処理ができるほど、国の対応が十分でなく、身の回りには危険がいっぱいだった。



かきもと かずお 垣本 一男 さん(77歳)赤岡町

事故当日は、赤岡の浜が騒然となつて、地獄のような惨状だった。肉片が散らばりどれがどの子か分からなくなっていた。遺族はこの帯ひもはうちの子じゃ、頭のハゲのある子はうちの子だ」と亡骸(なきがら)を持ち帰った。
被害に遭ったのは思慮分別のある年の子どもたちではなかった。機雷に付いていた力キや珍しい貝を石でたたいて捕ろうとした折の事故だった。監視中の警官が現場を離れたわずかな時間の出来事であり、すっかりした警備体制ができていればこんな惨事は起こらなかっただろうと残念に思う。
当時は、今では想像もつかないほど人の命が軽んじられ、心がすさんだ世の中だった。その中で起こった大事故だったのだ。

赤岡の浜が騒然となつて地獄のような惨状だった

親友は自分が12歳のときに事故に遭った

事故のあった日は、日本晴れで波もない穏やかな日だった。その日は親の漁の手伝いもなく、たまたま朝早くから親友のおーぶい(通称)と浜に遊びに来ていた。

機雷が波打ち際へ近づいており、信管が岩にあたりと怖い音、いものごとと言つて帰路についた。途中、ふざけて、どっかーん!と大声で、おーぶいを驚かせた。おまん、怖がらしなや!とはしゃぎながら家に帰り着いた。

機雷が浜へ寄つたぞーと近所が騒ぎ始めた。
自分は、目の前にいた母に「機雷が浜にあがったらしいけど、見に行つたらいかんよ」と念押しされながら、もう、とつくに見たよ」と心の中で思っていた。

機雷が恐ろしいものという知識はあったが、子どものころは怖いもの見たさや興味のほうが勝っていた。
そこへおーぶいが顔を出して、浜に行こうと誘いに来た。母がい



おおまえ いわほ 大前 岩保 さん(73歳)赤岡町

たので、ダメダメという仕事をしたら、おーぶいは、じゃあ」と手をあげて、浜の方へかけていった。
それが自分の見たおーぶいの最後の姿だった。
しゅーつと煙が出だしたときにすぐ逃げ出した小さい子らは爆風にあおられたが、大事には至らなかった。爆風と一緒に肉片が飛んできて、それはそれは大惨事やった。
おーぶいは機雷に馬乗りになつていたので、姿形も残つていなかった。怖いものと知っていた機雷のもとへ、どうして行つたらう……。
おーぶいは何にひかれたのか今でも考えている。

おーぶいは「じゃあ」と手をあげて浜の方へかけていった